

今月の題字
大出陽介さん

(館林市岡野町)

大間々駅のトイレ掃除仲間の中澤秀夫さんのお孫さん。大学生になった今でもお母様の生まれ故郷の大間々が好き、大間々のおばあちゃんが大好きでした。

虹の架橋は足利屋・さくらもーるアスクが毎月1日発行する地域新聞です。

第302号

令和2年10月1日発行
企画・編集 松崎 靖
発行 (株)足利屋洋品店
みどり市大間々町4-1380 (〒376-0101)
Tel 0277-73-1212
Fax 0277-70-1066



十月十一日童謡ふるさと館で『音楽とおはなし』

日本を代表するフルート奏者でジブリ映画の音楽なども担当している荒川洋さんの「音楽とおはなし」と題するコンサートが開催されます。会場はみどり市東町の童謡ふるさと館ファミリーホール。自然が豊かで地域の歴史や文化が薫る会場は、たくさんの優しい気持ちと出会える場所です。フルートとピアノ、そして朗読が織り成す「森のコンサート」にご家族お揃いで是非お越し下さい。第一部はフォーレの子守歌、荒川洋編曲の「崖の上のポニョメド



日時：2020令和22222年10101010月11111日(日)10
11部11313：131313時半 2部：14時半開演
場所：童謡ふるさと館ファミリーホール
出演：荒川洋/フルート
真下陽子/ピアノ
あしの会・あずま語りの会・わらべの会/朗読
参加費：1部2部11111通し大人20002000円

レー、音楽物語「バルボンさんのおさんぽ」他
第二部は「アメージング・グレイス」、音楽物語「スイミー」他
このコンサートは、新型コロナウイルス感染症防止に細心の注意をはらって開催します。ご来場者にはみどモスオリジナル缶バッジをプレゼント。チケットは足利屋にもあります。



小耳にはさんだ いい話 (文責・菊) 《302》

「リト」が教えてくれたもの

元特別支援学校の先生で作家の「かつこちゃん」こと、山元加津子さんが『リト』(モノ森出版)という本を書きました。今から21年前、虹の架橋で「さいちゃんの浴衣」という、さいちゃんとかっこちゃんとの感動的なお話を紹介し、なごめ余興場でかつこちゃんの『1/4の奇跡』という映画会や講演会を開き、この町にも、かつこちゃんのファンが大勢います。「リト」は生まれたばかりの子犬の名前です。リトは色々な人

や猫や老犬と出会う中で様々な疑問を抱きます。「役に立ってどういふこと?役に立たないってどういふこと?」「かえのらないものって何?」。リトの質問に、「お金にならないものはいらぬ、お金になることが大切」と言っていた人たちが少しずつ自分達の間違いに気づいていくというお話です。リトが最後に出逢ったのは村はずれの小さな家に住むオリーという名の女の子で、パン職人のママと二人暮らしでした。リトはオリーと出会ったお陰で自分の名前がなぜリトなのかを知りました。そしてパン職人

のママの「私はお金儲けがしたくて、パンを焼いているわけじゃないの。食べた人が幸せだって言ってくれたら、それ以上に嬉しいことではないの。みんなが幸せだと自分も幸せ。だから、みんなの幸せを祈りながらパンを作っているの。お金よりも大切なものをいっぱい話聞いて、今まで出会ってきた人たちはお金があってもママほど幸せそうじゃなかったと思います。リトがママとオリーと暮らし始めて一年後、街に流行り病が発生し、たくさん人が死んでゆき、賑やか

だった街は急に寂しくなりました。10年前にもこの街に同じ流行り病が広がり、オリーのパパは目の前にいる人を助けるために病気がうつって亡くなったのでした。パパはどんなに困ったことが起きても、口癖のように「これも、いつかいい日のためにあるのだから」と言っていました。この物語の結末に感動し「サムシング・グレート」の存在を確信しました。今、この時に多くの人に読んでもらいたい本です。

虹の架橋「検索」で、インターネットからでもご覧いただけます。

第三百三号は十一月一日(日)発行予定です。

世界一小さな 定利屋 トイレ美術館

今月の絵《302》

大野勝彦さん『病気は…』



熊本の義手の詩画家・大野勝彦さんから来年のカレンダーが届きました。同封されたお便りに「近年、増々多くなった災害訓練も自分が生きている証しであり、一日を大切にしたい」という教えだろうと思えます」と書かれています。カレンダーに添えられた12枚の詩画には『今が旬です。そう私のことです』、『感謝はしてもらいものではなくて、自分の方がするものでした』といった素敵な言葉が書かれています。大野勝彦さんのカレンダーは足利屋にもあります。税込1500円でお分けしています。

「もろともにながめし人も我もなき宿には月やひとりすむらん」という昔の和歌がありました。共に月を眺めたあなたのいない家、あなたが亡くなってしまったので私も通わなくなった家、その家には今頃ひとり月が住んで、澄んでいるのだろうか、という想いが込められた和歌です。我家の玄関前に移植した彼岸花が咲きました。昔の和歌と同じ想いで我家に植え替えた花でした。彼岸と此岸に別れてしまった今でも、毎年同じ頃に同じ色で咲く彼岸花を見ると、共にながめていた頃のことを思い出されます。

靖ちゃん日記

令和二年九月十七日(木) ネットで支援活動を続けているOKバジと垣見一雅さんから携帯に電話が入った。元気そうな声を聞いてお互いに喜び合った。コロナ騒動以来、日本とネパールとの郵便物は双方とも受付停止、虹の架橋も半年間送っていない。OKバジが支援活動をしている村々では、貧困がさらに深刻化し、貧しい家々にコメを支援しているという。日本の千円で二十五キロのコメを支援できるというので、友人達から預かっていた寄付をコメ支援のためにOKバジの口座に送金した。「苦しい時こそ、他者を助けると自分が救われる」という言葉を思い出した。日本からネパールまでは五二〇〇キロ、途中にヒマラヤ山脈も聳えているので、電波の感度が悪く、声が途切れ途切れだった。電話を終え、急いでトイレに駆け込み、チャックを下した。昔は感度が我慢で怒りもあったが、この方も途切れ途切れだった。



やっちゃんの似顔絵提供：ひさかさん